



TITLE:

オンギン碑文に関する一考察: その 設立目的と設立年代を中心として

AUTHOR(S):

澤田, 勲

CITATION:

澤田, 勲. オンギン碑文に関する一考察: その設立目的と設立年代を中心として. 東洋史研究 1983, 41(4): 696-717

ISSUE DATE:

1983-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153880>

RIGHT:

オンギン碑文に關する一考察

——その設立目的と設立年代を中心として——

澤 田 勲

はじめに

一 オンギン碑文の翻譯とその構成

二 「テングリケン」とは誰か

三 碑文に見える Toruz Oruz 遠征

四 碑文南面第三行の解釋

五 碑文主題者（埋葬者）の死

結びに代えて

は じ め に

現在知られている古代チュルク語碑文の中で、比較的古くから知られていながら、今だにその全貌が明らかにされていない碑文の一つに、いわゆるオンギン (Ongin) 碑文がある。⁽¹⁾ とりわけ、近鄰で發見されたバインツォクト (Bain-Tsokto) 碑文——噶欲谷 (Tonugug) 碑文——、ホショーツァイダム (Khoshon-Tsaidam) 碑文——關特勤 (Köl-Tegin) 碑文と毗伽可汗 (Bilga-Qayan) 碑文——が、その製作者及び設置年代まで明らかにされているのに對して、オンギン碑文はこのような基本的なことから解明されないままとなっている。

勿論、このような疑問に對し、先學達はただ手を拱いていたわけではない。オンギン碑文の拓本取りにその精力を傾けたラドロフは、⁽³⁾ この碑文を突厥第二王朝の始祖骨咄 (吐) 祿のものとして最初に考えた。⁽⁴⁾ これを承けたマルクワルトはラドロ

フの研究に據りながらも若干の修正を加えつつ、本碑文を骨咄祿の弟で後に大可汗の地位に就いた默噶の記念碑であると主張した。⁽⁵⁾ このマルクワルトのラドロフ批判は、ラドロフをして若干の訂正を餘儀なくさせた。そして、かれは先の見解を撤回して、骨咄祿の遠い親戚にあたる西系突厥の王子の碑であろうと考えるに至った。⁽⁶⁾

このようなラドロフ、マルクワルトの兩氏の見解に對し、小野川秀美氏は、逐一それらを検討しながら、骨咄祿・默噶の弟として中國史料に見える咄悉匐を、オンギン碑文の主題者（埋葬者）にあてて見解を提出された。⁽⁷⁾

いずれにせよ、これらの學說に共通していることは、闕特勤碑文等に刻まれている野生の牡山羊と思われる線刻狀のタムガが、オンギン碑文の上部に刻まれているものと類似していることより、いずれも突厥阿史那氏一門の記念碑であろうとしていることである。だがその設置年代については、八世紀初頭のものとしているだけで、具體的な年代設定は示されていない。⁽⁸⁾

ソ聯邦の學者による古代チュルク語の研究は、質量共に他のそれを壓している。ただオンギン碑文に關する專題研究となると、他の碑文に比べて決して多いとは言えず、しかもそれらの大半が——一部の研究を除いて——轉寫と譯注にその精力が注がれているようである。⁽⁹⁾

このような中でただクローソンのみは、その設置年代についてはっきりとした見解を示している。⁽¹⁰⁾ かれは、ラドロフの考證を逐一検討しながら、オンギン碑文は、敕欲谷碑文や闕特勤碑文を模倣して製作されたものであるとして、その製作年代を、碑文の主題者 *Elētmiš yabγu* が死亡した末の年——七三一（開元一九）年——の直後、七三二（開元二〇）年から七三四（開元二二）年末の間に求めるべきであると主張する。⁽¹¹⁾ かれの論稿には教えられる點が多々あるが、碑文の主題者 *Elētmiš yabγu* が末の年に死亡した——實際は辰年であるが——とする見解を絶對視して、それより碑文設置の年代を決定する方法には納得いかない。特に、オンギン碑文が、敕欲谷碑文や闕特勤碑文をモデルとして作成されたとする見解には、多くの疑念があり輕々しく従うことはできない。

以上見てきたように、一九世紀末葉以來、幾多の先學達の眞摯な努力にも拘らず、今だに我々をして十分納得させうる回答が與えられていない。このように、オンギン碑文の解明が遅れている理由は、二つある。一つは、この碑文が長年風雨に晒され、發見當初より一部復元が不可能なほど損傷し、解讀が極めて困難であつたこと。もう一つは、碑文の文章に一部支離滅裂などところがあり、若干の矛盾を含んだ内容となつてゐることである。特に、碑文主題者の事跡と設立者の事跡が混在し、碑文全體の構成が統一されてゐないことにもよる。

それ故、本碑文解明の手だては轉寫と翻譯のより正確さと共に、碑文の中に見られる矛盾を解きほごし、碑文建立者の意圖を解明することがより重要かと思われる。私は別稿において、碑文の主題者と建立者の關係を記したと思われる東面第四行について詳しく検討しておいた。そしてそこでは、オンギン碑文の主題者として現れる「我が父」Ilimis yabyuが、中國史料に見える咄悉匐であつて、Ilimisとは突厥語の正式名稱であることを證明した。そして、建立者はIlimis yabyu (咄悉匐) の二男であらうと推定し、東面第四行が建立者の自己紹介の件りであることを明らかにした。

本稿では別稿の結果をふまえながら、ラドロフ以來の先學の研究に導かれつつ、オンギン碑文の設立年代及びその設置目的について若干の考察を試みてみたいと思う。

尙本稿を作成するにあたって利用した史料は、ラドロフの『モンゴル考古圖譜』⁽¹³⁾ (一八九六年版) に收められている寫眞と拓本である。

一 オンギン碑文の翻譯とその構成

オンギン碑文は、東面(正面)に八行、南面(側面)に四行、そして南面の上部に七行からなるルーン體文字が刻まれている。そしてそれらの文字は、上方から下方へ、右側より左側に續いてゐる。東面の上部には、闕特勤碑文と共通する野生の牡山羊を描いたと思われる、線刻模様のタムガが刻まれている。以下、その全譯を紹介してみよう。⁽¹⁴⁾

(東面)

- (1) 我らの祖先ヤミ可汗 (Yami Qayan) は四隅を壓したり、脅かしたり、ゆさぶりたり、撃ちたり。その汗が亡くなった後に、國は、失なわれたり、滅びたり、四散したり……
- (2) 可汗として立てた可汗を、消えつつ見送りたり。突厥の民、東は日の昇るところ、西は日の沈むところまで、南は唐に、北は山林まで……

(3) 勇士をバルバルとして立てたり。突厥の民、名を失ないて、行きてありたり。突厥の民、失なうべからずと言いて、犠牲たるべからずと言いて、上なる天が、言いてありたり……

(4) カプガン・イルテリシュ可汗 (Qapγan Ilteris Qayan || 默噶頡利施可汗) の國に、我育ちたり。(我は) イリトミツシュ葉護 (Ilrimis Yabγu || 咄悉匄) の息子のイシュバラ・タムガン・噉たるヨガの弟で、賢明な、イシュバラ・タムガン達干たる。高貴な、(我が父) イリトミツシュ、我が兄、……

(5) この唐より北に、オグズのタッグ (Taγγu) の間に、七人が、敵となりたり。我が父は、バガ・テングリケンの方に、そこへ行きたり。勢力を擡げたり……

(6) テングリケンに、心を擡げたりと言いて、恵みたり、設 (set) の名を、そこで與えたり。(設と) なりし時、トグズ・オグズのタッグが、敵となりたり。強かりし、テングリケン行きたり。

(7) 惡しき、我ら少きを、(かれら) 多きを見たり。だが、我征服せんと、言いてありたり。今、ベグ達に、言いてありたり、我ら少なしと言いて、恐れたり……

(8) 我が父、設は、このように請えり、テングリケン、取るなと言いて……民、そこで與えず、(逆境に) 遭いたり……

(南面)

(1) すべての町に、我攻めたり、我討ちたり。我取りたり、その軍來たれり、黒き(民)を我脅かしたり、そのベグは逃げたり。……唐の民……我撃ちたり。我脅かしたり……我襲いたり、我追ひ拂らいたり、嵐のように、

(2) 來たりて、我らありたり。その兩者の間にタッグが敵となりたり。我攻めるを欲せずと言いて、我與えたり。天ビルゲ(賢明な)

可汗 (Ta'ni Bilgä Qayan) に、更なる努力を、我捧げたりき。攻めたので……我脅かしたり、我家に攻め歸って……

- (3) 攻めながら、我が家に、我が息子に、このように忠告したり。留まりて、イルテリシユ可汗 (Ilterish Qayan) に離れず、裏切らず、天ビルゲ (賢明な) 可汗 (Ta'ni Bilgä Qayan) から、我離れず、我迷わずと言いて、このように、忠告せり。歩み行くもの行きたり。(ビルゲ可汗の民) ……行きたり。偉大な名前に、努力を捧げたり。

- (4) 上なる天汗が、辰 (三) の年第七の月に、力強き勇敢な可汗より、離れて行きたり。賢明な我が父の葬式を、取り行ない、汝の絹布を、我得たり。水地天時、唐に入りて (ありたり)

(南面上部の銘)

- (1) 我が父に、記念碑を、(2) 我つくりたり、永遠に、(3) 我が可汗、我が父、(4) 賢明な、我が父、(5) 辰 (三) 年に、賢明な、(6) 周知の、人良き汗、(7) 我が父、死したり。

(第一墓石の銘)

イシユバラ・タルカンのバルバル

東面の第一行から第三行は、オンギン碑文の「序文」的性格をもつ。先づ、碑文製作者の祖先ヤミ可汗が、「四隅」すなわちかれらが知る限りの世界を征服したと記す。ところがその後、突厥汗國が滅び、それを再興することがかれらが信ずる天の命であると述べる。これは、突厥の民こそが、この地すなわちモンゴリアを中心とする草原地帯の眞の主人公であることを表明したものである。このような手法は、ホショーツァイダム碑文などにも見られ、先に護雅夫氏も指摘されたように、⁽¹⁶⁾ 突厥人の「政治的ナシヨナリズム」の思想を示したものであろう。⁽¹⁷⁾ 「序文」に續く東面第四行は、私も先に指摘したように、⁽¹⁸⁾ 碑文建立者の自己紹介の件りである。そして、東面第五行から南面第二行にかけて、トグズ・オグズや唐への遠征の事跡を記す。この遠征には、碑文主題者「我が父」の活躍を述べると共に、その後半部分で、碑文建立者の活躍もつけ加えられている。更に、南面第三行では、碑文建立者の政治的立場を明らかにし、その第四行では「辰年」に死亡した父の葬儀を主宰したと結ぶ。

要するに、東面第一行から第三行までが「序文」、東面第四行から南面第四行までが「本文」、そして南面上部の銘が「結文」である。オンギン碑文は、建立者の父が突厥王朝再興に盡力したとしながら、建立者自らの事跡を加えて、自己の存在を際立たせている。このような手法は、建立者の偉業を自ら讃美したバインツォクト碑文と比べて、その趣きを著しく異にしている。

二 「テングリケン」とは誰か

東面第四行において碑文建立者の「我」は、*Ilimis yabyu* の息子となっている。*Ilimis yabyu* が、骨咄祿・默噶の弟として中國史料に見える咄悉匐であることは、別稿で述べておいたのでここではさけるが、*Ilimis* が咄悉匐の突厥語名稱であることは、ほぼ間違いない。その *Ilimis* (＝咄悉匐) が、「勢力を捧げたり」とする東面第五行以下に登場する「テングリケン (*tänglikan*)」とは誰か。言うまでもなく、「テングリケン」とは、大可汗に贈られた尊稱である。⁽²⁰⁾ それ故、この「テングリケン」とは、咄悉匐が仕えた骨咄祿、默噶のいずれかでなければならぬ。

小野川秀美氏は、この「テングリケン」を突厥第二王朝の創設者骨咄祿の別稱とされ、東面第五行以下の記事を、骨咄祿時代における唐及び九姓との戦いに比定さるべしと考えられた。⁽²¹⁾ 岩佐精一郎氏の研究によれば、突厥の「九姓」＝*toynon* 経略の開始は、垂拱二(六八六)年から同三(六八七)年頃と言われるので、このオンギン碑文の「九姓」経略記事は、垂拱二年より骨咄祿が死亡した天授二(六九二)年頃までの記事ということになる。

ところが、オンギン碑文は續けて第六行に、「テングリケンに心を捧げたり」と言いついて恵みたり。設の名をそこで與えたり……」と記し、「我が父」すなわちイリトミシュ葉護(咄悉匐)が「テングリケン」より設の名を與えられたとされている。⁽²⁴⁾ 『舊唐書』卷一九四突厥傳上によれば、

(聖曆)二年、默噶はその弟咄悉匐を立てて左廂察となし、骨咄祿の子默矩を右廂察となし、各々兵馬二萬餘人を主らしむ。

とあり、咄悉匐は聖曆二（六九九）年默啜より左廂の察を與えられている。ところが、同一の事實を述べたと思われる關特勤碑文、毗伽可汗碑文では、

我が叔父（默啜）が可汗に即きし時、我自ら特勤なればとて、我が叔父の可汗に、勢力を我捧げたり。天（恵みあれば）我が十四歳の時、タルドゥシュの民の上に、シャドを、我占めたり。（I E17, II E14—15）

とあつて、默矩（默棘連）がタルドゥシュ（右廂、右翼、西部）の設に就いたのは、かれが十四歳の時すなわち神功元（六九七）年のこととされている。

このように、突厥・中國の兩史料の間に若干の年代的な差違が生じている。⁽²⁴⁾ 默矩がタルドゥシュの設に就く前に、その地位は默啜が就いていたことは、

（骨咄祿）乃ち自ら立ちて可汗となる。弟の默啜を以て殺（設）となし、（同じく弟の）咄悉匐を棄護となす。（『新唐書』卷二二五

突厥傳上）

テリス（*tolis*）とタルドゥシュ（*tardus*）の民を、その時かれ（骨咄祿＝*Ilaris Qayan*）整えたり。ヤブグを、シャドを、その時かれ與えたり。（I E13, II E11—12）

とあるように、中國・突厥の兩史料より明らかである。要するに、默啜が天授二（六九二）年可汗に登位したが、その時默矩は八歳と年若いため、默啜が可汗位とともにタルドゥシュの支配權をも同時に占めていたものと考えられる。元來、可汗位は骨咄祿の子默矩が繼承すべきであつたが、かれが年少であることを理由に默啜が可汗の地位に就いた。⁽²⁵⁾ こうした経緯があつたが故に、默啜は成長した默矩を特勤から設に昇格させ、これまで空位のタルドゥシュの設に就けたのである。このように見るならば、默矩の設（察）就任の記事は、突厥側の史料が「ヨリ」正確であると言えよう。

私が、あえてここで「ヨリ」正確であるという語句を用いて表現したのは、中國史料が誤まった記載をしていたわけではないからである。前述の『舊唐書』卷一九四突厥傳上は更に續けて、

その子匭俱をして小可汗となし、位は兩察の上に在り。處木昆ら十姓（西突厥）の兵四萬餘人を主らしむ。又、號して拓西可汗となす。

とあって、默噶が東西兩察の上に、我が子匭俱を小可汗に据えたことと記している。

默噶が匭俱を小可汗に据え拓西可汗と名乗らせたことに、二つの理由が考えられる。一つは、小可汗は副可汗の性格をもつものであるから、それに我が子を就かせることによって、可汗位を默噶一門で獨占せんとはかったことである。元來、遊牧民は東方すなわち左方を尊しとしていたことは、匈奴の官職を例に引くまでもなく明らかである。しかも葉護は、設より上位で可汗に次ぐ地位として考えられていた。咄悉匭が兄骨咄祿より左方の領域支配を任され、その上葉護の稱號を與えられていたことは、かれが當時副可汗的地位にいたことを物語っている。それ故、咄悉匭のもつ葉護の地位を廢止する必要があつた。咄悉匭が葉護より設へと稱號が變更されたのは、かかる事情によるものと思われる。もう一つは、默噶一族の主たる基盤が西方にあつたことは、かれがかつてタルドゥシュ設であつたことから明らかである。その主たる基盤を最大の競争者たる骨咄祿一門の默矩に譲り渡すことは、自己の政權を維持する上で非常に危険なことである。かれがあえて我が子匭俱を、拓西可汗として西方統治を委ねたのは、骨咄祿一門を軍事的に監視し、自己の政治的・經濟的基盤を確實にするためであつたものと思われる。

先の『舊唐書』突厥傳の記載では、あたかも默矩が聖曆二年に右廂察になつたかの印象を受けるが、そうではなくて、默噶が我が子を小可汗に就けたのがこの年であつて、その時既になされていた默矩右廂察就任の記事を附け加えたにすぎないのである。勿論、咄悉匭の葉護から設への稱號變更は、匭俱の小可汗就任によって附隨的に生まれた現象である。

オンギン碑文が、あえて「我が父」の官職を、第四行で *yabqu*＝葉護、第六行で *sad*＝設と各々明記したのは、第四行から第六行への時代的な流れを指し示したものではなからうか。ともあれ、碑文東面第六・七・八行にそれぞれ見える「テングリケン」が、默噶であることはもはや疑いをいれない。

三 碑文に見える Toruz Oruz 遠征

オンギン碑文東面第五行、第六行及び南面第二行に見える tag, tæg, tīg あるいは aīg と轉寫され得るルーン體文字は、*mo* とされている。*mo* とともに、私の知る限りでは他の突厥碑文では見られず、普通、*mo* は *m* であり又 *o* は *o* となっている。更に、オンギン碑文でも普通 *h* は *h* で示されており、問題のこの部分だけ三字とも *o* で統一されている。それ故、石碑を刻した人の誤まりとも思えず、*o* は *h* に近い音であったが、オンギン以降の碑文では *o* は *h* に統一されたものと考えられる。

ところが、*o* は硬母音を伴う文字、*mo* は軟母音を伴う文字であって、その轉寫は極めて難解である。ラドロフは、問題の文字を tag と轉寫して「力強く」と譯し、小野川秀美氏は tæg と轉寫して、「に對して」とか「に向けて」と解釋された。⁽⁶¹⁾ しかし、例えば南面二行の冒頭部分を、「兩者の間に力強く敵となりたり」とか「兩者の間に向けて（對して）敵となりたり」と譯したのでは、全く意味が通じない。他の二行でも言えることだが、ここは形容詞及び副詞的に譯すべきではなく、名詞として理解すべきであろう。マローフ、⁽⁶²⁾ アイダロフらソ聯の學者は、一様に dag と轉寫し、「オグズのベグの間に七人が敵となりたり」(OES)、⁽⁶³⁾ 「トグズ・オグズのベグが敵となりたり」(OEG)、⁽⁶⁴⁾ 「兩者の間にベグが敵となりたり」(OES) と翻譯している。このように譯すと意味は通じるが、ベグなる文字は同碑文の東面第七行及び南面第一行に *mo* とあつて、明確に字を區別しているので従えない。更に、クローソン、⁽⁶⁵⁾ テキンの兩氏は、問題の文字を合成文字と理解して aīg と轉寫し、トグズ・オグズの部族名と解釋した。遺憾ながら、クローソンらが主張する aīg に相當する部族名を中國史料より見出しえない。

以上のように先學の見解は分れているが、問題の三行の文面からして、*mo* は名詞として理解せねばなるまい。特に、南面第二行においては、*mo* は主語であつて「に向けて」「に力強く」ではない。元來、中國史料は、北方民族の對中國

政策（朝貢・侵寇）についてはその記事が比較的豊富であるが、かれらの對部族政策については、極めて簡略な記述となっている。それ故、中國史料に見えないからといって、それが部族名ではないという否定の材料とはなるまい。私は九姓の一部族同羅（taugra）の詰まったものと豫想するが全く確證はない。いづれにせよ、突厥が東方にあってその支配に苦勞した Toyz Oruz（九姓）の一派であらうと考える。

ところで、イリトミシュ葉護（咄悉匐）が盡力した「九姓」討伐とはいつ頃のことであらうか。同碑文の東面第六行に「テングリケンに心を捧げたりと言いて恵みたり。設の名をそこで與えたり。（設）となりし時、トグズ・オグズの Toyz Oruz が敵となりたり……」と記述されている。クリヤシュトルヌイは、このテングリケンエルテリシユ可汗（骨咄祿）と理解し、これを突厥のゴビからハンガイへの移動の直前——六八七年以前——における軍事情勢を述べたものと解釋された。⁶⁶だが、先にもふれたように、このテングリケン⁶⁶は決して骨咄祿ではなく黙噉である。咄悉匐が骨咄祿、黙噉の二代にわたって、特に東方で他部族——契丹・奚・鐵勒——經略に意を注いだことは想像するに難くない。咄悉匐一門の手に成るオンギン碑文の中に、とりわけ、「九姓」が集中的に登場するのは、それだけ「九姓」攻略に苦心したことを示している。「九姓」支配にとりわけ苦勞したのは、骨咄祿時代ではなく黙噉時代であったことは、次の噉欲谷碑文の

イルテリシユ可汗（骨咄祿）、その賢明さの故に、その勇敢さの故に、唐へ十七度戦った。契丹へ七度戦った。オグズへ五度戦った。
(T 98—49)

とする記事からも明らかで、むしろ骨咄祿時代は唐・契丹が主要な敵であって、「九姓」は突厥に反抗する力をまだ十分に持ち合わせていなかったようである。それ故にこそ、骨咄祿は突厥の故地を回復しえたのかもしれない。

黙噉時代における對九姓關係を傳える中國史料は、極めて少ない。それ故、その關係を知り得るのは難しいが、「九姓」が黙噉可汗の下で、決してその支配に甘んじていたわけではなかった。『新唐書』卷二一七回鶻傳上に、

武后の時、突厥の黙噉まさに盛んとなり、鐵勒の故地を取る。故に、回紇は契苾、思結、渾の三部と磧を渡りて甘（州）涼（州）の

間に徙る。

とあり、默噠の「九姓」討伐は休むことがなかった。又、關特勤碑文でも、

九姓の民そのものは、我が民であった。天地の混亂の故に、敵となりたり。一年に五度戦った。(Zb)

とあり、中國史料に見える以上に、突厥の「九姓」攻略は激烈をきわめていたようである。⁽⁸⁷⁾そして、『新唐書』卷二一五

突厥傳上には、

景雲年間、西に娑葛を滅ぼし、(東に)遂に契丹・奚を役屬す。因りて、その(支配)下を虐用す。既に年老いて愚行暴行し、(配下)の部落は怨み叛く。

と記されているように、默噠の晩年には、各地の隸屬諸部族が、その壓政に對し反亂を起すようになっていた。西方突騎施の反亂は噶欲谷碑文にも現れるが、⁽⁸⁸⁾さきに翻譯したオンギン碑文東面第六―七行の記事は、咄悉匄の東方領域においても突厥隸屬部族が執拗に阿史那政權に反抗していたことを示すものである。

ところで、さきに翻譯しておいたオンギン碑文東面第五行以下の數行をみると、まず問題になるのは、東・南兩面の記事が關聯あるかどうかである。いずれも共通していることは、「九姓」をはじめとした對立諸部族への遠征記事であるということである。だが、東面は碑文主題者たる父の事跡、南面は碑文建立者の活躍を描いている。これは一見すれば、時代的背景が全く別個のものとして解釋されうるが、注意深く讀むならばそれぞれが獨立した記事とはいえない。

オンギン碑文東面第六行から第八行にかけて、「九姓のタッグ」が極めて強力で、突厥側が苦境に立たされていたとされている。こうした形勢は、南面第二行でも「我攻めるを欲せずと言いて我與えたり」とある如く同様である。だが更に續けて、*tägilükün* (攻めたり) *syrdim* (我脅かしたり) として、「九姓タッグ」を攻略したとも記している。こうした手法は、噶欲谷碑文でも見ることができる。たとえば

多いと言って、何故、我々は恐れるか。少きと言って、なぜ我らは攻撃しないか。我攻めんと、我言いたり。我らは攻撃したり、追

い拂いたり、第二目にかれらは來た。火の如く熱くなりて、かれらは來た。我らは戰つた。我らより一翼半ほど餘計であつた。天が恵みをたれた。故に多きと言つて、我らは恐れなかつた。我らは戰つた。タルドウシュのシャドが加わつた。我らは逐つた。かれらの可汗を我らは捕えた。かれらのヤブグをシャドをそこで殺した。(T39—41)

とあり、突騎施との戰爭で不利ながら勇敢に戰つたと、自己を誇示している。

このように、兩碑文に共通していることは、不利であっても勇敢(ay)に戰つたことを誇示し、それを通して自己を賞讃するという手法である。先に翻譯したオンギン碑文の東面第五行以下の數行でも、こうした手法は隨所に見られる(Ob 6.7.8, OS2)。そして特徴的なことは、このような表現法を通じて、東面で示された「我が父」の偉業を、南面において碑文建立者「我」の功績へと轉化していることである。

それ故、從來言われてきたように、オンギン碑文東・南兩面に見える「九姓」攻略記事は、各々獨立したのではなくて連續した記述と見なさねばなるまい。同碑文東面第六行に「(設となりし時、オグズの *qas* が敵となりたり」と記されているのは、「我が父」(咄悉匄)が設となつてすぐにといい意味ではなく、その在位中にといい意味に解すべきであらう。

四 碑文南面第三行の解釋

これまでの考證に大過なければ、オンギン碑文東面第六行より南面第二行にわたつて見られる九姓 *tas* の遠征記事は、碑文主題者咄悉匄の左廂察在位中——聖曆一(六九九)年から開元四(七二六)年——の記事と推定され得る。

ところが、先に翻譯したオンギン碑文南面第三行では、碑文建立者「我」が一族の者に「*Itaris qayan* に我離れざる、我裏切らざる、*Taŋri bilgä qayan* に我離れず、我迷わず」と忠告している件りがある。從來、文中にある *Itaris qayan*, *Taŋri bilgä qayan* を、それぞれ骨咄祿及び默矩すなわち咄伽可汗にあてるのが通例であつた。とすれば、私がこれまで述べてきた東面の數行に見える「テングリケン」を默祿に、そして、それらに見える「九姓」討伐記事を咄悉匄

左廂察在位中のものとする考えと大きく矛盾する。では問題の行を、いかに解釋すべきであろうか。

これまでの大方の通説では問題の南面第三行は、骨咄祿一門と默噶一門政争中の事件として、「我が父」が骨咄祿可汗に忠誠を誓ってきたのであるから、同様その子の毗伽可汗にも忠誠を誓うべきであると解釋されてきた。⁽⁴⁰⁾ところが小野川秀美氏は、文中の *Itaris qayan* を默噶と理解して、「默棘連が默噶より離叛しなかったので、我等も毗伽可汗より離叛してはならぬと戒めたものである」と⁽⁴¹⁾と解釋された。通説と小野川説の間に、*Itaris qayan* を骨咄祿、默噶とそれぞれ見る違いがあるが、*Taŋri bilgā bayan* を默棘連⁽⁴²⁾毗伽可汗と見る点では共通している。たしかに、このような解釋が成り立たないわけではないが、別稿でも述べ、又本稿でも確認しておいたように、オンギン碑文が咄悉匐の紀功碑である以上、これらの説には多くの疑念を抱かざるを得ない。なぜなら、後で述べるように、咄悉匐は骨咄祿一門によって倒されたからである。その敵方の盟主に忠誠を誓うことはいかにも奇異であるからである。

小野川秀美氏も⁽⁴²⁾私も舊稿で述べておいたように、⁽⁴³⁾*Itaris qayan* が骨咄祿だけの稱號でなかったと同様、問題の *Taŋri bilgā qayan* も必ずしも默棘連⁽⁴²⁾毗伽可汗に比定さるべきだと私は考えない。

Bilgā (賢明な) なる稱號を帯びていた可汗を中國史料より拾い出して見ると、骨咄祿毗伽闕可汗(『新唐書』卷二二五突厥傳下)を始めとして十數可汗にも及んでいる。⁽⁴⁴⁾このように、古代チュルク系民族の間で廣く可汗の稱號名として尊稱されたのは、闕特勤碑文、毗伽可汗碑文に、

良い賢明な人を、良い勇敢な人を進めなかったと言う。(I S6, II N4)

天神のような、天神から生まれた、突厥の賢明な可汗。(I S1, II N1)

賢明な可汗であったという、勇敢な可汗であったという。その高官も又、たしかに賢明であったという、たしかに勇敢であったという。(I E3, II E4)

と見られるように、賢明 (*bilgā*) ということが勇敢 (*alp*) と共に、可汗としての條件資格であり、更に廣く古代チュルク

ク人の間で根をおろしていた美徳觀念でもあったからである。⁽⁴⁵⁾

以上のように考えてみるならば、オンギン碑文の建立者が一族の者達に述べた問題の件り（南面第二・三行）は、默矩（咄伽可汗）への忠誠を要請したものでなく、うち續く戦争で厭戦的な氣分が起りつつある一族の軍隊を引き締めんとし、言われたものと思う。それ故、ここは、咄伽可汗という一限定された個人名として解釋するのではなく、天なる賢明な可汗と形容詞的に讀まれるべきと考える。そして、この抽象化された可汗こそは、碑文建立者の父で一族の長たる咄悉匐を尊稱したものと思う。

五 碑文主題者（埋葬者）の死

オンギン碑文の「本文」は、碑文主題者の死を告げて結んでいる。南面第四行の冒頭部分は、「上なる天汗が、辰の年の第七の月に、力強き、勇敢な我が可汗より、離れて行きたり」と述べ、その上部の銘第三行から第七行にかけて、「我が（可汗）、我が父、辰の年に、賢明な人、良き汗、我が父死したり」と記述している。本稿の冒頭でも述べておいたように、「我が父」の死を辰年ではなく未年とする見解もあるが、⁽⁴⁶⁾南面上部の銘の記述からも明らかのように、やはりここは通説通り辰の年と解釋すべきであろう。

「我が父」が死亡した辰年とはいつか。その解明の手がかりを中國史料より求めてみよう。『舊唐書』卷一九四突厥傳上に、

（開元）四年、默嚧は又北に九姓の拔曳固を討ち獨樂河に戦い、拔曳固大敗する。默嚧勝ちに負みて輕歸し、而るに備えを設けず、たまたま拔曳固の進卒たる頡質略に遇い、（頡質略）柳林の中より突出して、默嚧を撃ちて之を斬る。⁽⁴⁷⁾

とあるように、辰年の開元四（七二六）年に、默嚧は九姓拔曳固征討後、その油斷から伏兵の頡質略に殺されたとされている。默嚧の死が開元四年の六月であることは、『唐會要』⁽⁴⁸⁾その他の記事からも明らかである。默嚧死亡の報を得た骨咄

祿の子闕特勤は、骨咄祿系一族再興の好機として、

骨咄祿の子闕特勤は、舊部を鳩合して、默噶の子小可汗（匁俱）⁽⁴⁹⁾及び諸弟親信を盡く殺して、その兄の左賢王默棘連を立て、是を咄伽可汗となす。（『舊唐書』卷一九四突厥傳上）

とあるように、默噶の一族及びその功臣たちを皆殺しして、兄默棘連を咄伽可汗としたのである。

闕特勤舉兵を伝える中國史料は、オンギン碑文の主題者咄悉匁（Ilirnis yabyu）の消息について何んら語ってくれない。だが、『舊唐書』突厥傳は更に續けて、

（闕特勤）以て左賢王となし、専ら兵馬を掌らしむ。

と記録し、闕特勤が左賢王に就いて兵馬の實權を掌握したことを傳えている。左賢王は匈奴の例でも明らかのように、左方（東方）を領する王であつて、突厥においても同様であつたことは、かつて護雅夫氏が説かれた通りである。⁽⁵⁰⁾

先に引用した『舊唐書』卷一九四突厥傳上は、闕特勤が默噶の功臣たちを盡く殺したと記している。勿論、兄咄伽可汗のライバルとなりうる咄悉匁とて、その例外ではなかった。闕特勤による東方領域支配は、かつてこの地を支配していた咄悉匁の追放を意味する。オンギン碑文南面第四行に、辰の年七月「我が父」（咄悉匁＝Ilirnis yabyu）が死亡したと記されているのは、闕特勤による咄悉匁肅清を意味している。新舊兩唐書突厥傳にその後咄悉匁の消息について全く語られていないことは、かかる状況を示すものであらう。

ここで注目されることは、オンギン碑文の建立者が、「我が父」（咄悉匁＝Ilirnis yabyu）を、勇敢な（alp）かつ賢明な（bilga）可汗として呼稱していることである。咄悉匁について中國史料は、きわめて断片的にしか傳えていないが、かれが葉護・設の地位にはあつても、可汗を名乗ったことはどこにも記していない。とすれば、オンギン碑文の主題者を咄悉匁にあてることが間違っているのだらうか。否、決してそうではない。

新舊兩唐書の突厥傳は、先に骨咄祿可汗が死亡した際、その弟の默噶がその子默矩を抑えて可汗位に就いたと記してい

る。つまり、默噶が骨咄祿の地位を繼承することにより、この時點で可汗位繼承の原則は、親子相續より兄弟相續に変更されている。さすれば、默噶亡き後、その後繼者は弟の咄悉匭であると考へても決して不自然ではない。咄悉匭の息子たるオンギン碑文の建立者が、我が父を、勇敢で賢明な可汗と呼んだのも、かかる狀況が背景にあつたものと推察される。元來、突厥において可汗位を得るものは、闕特勤・咄伽可汗兩碑文に、

突厥の民の名聲が無くならぬようにと言つて、私の父である可汗を、私の母である可敦をもちあげた Tauri は、國を與えた Tauri は、突厥の民の名聲が無くならぬようにと言つて、私自身を、その Tauri は可汗として、たしかに即位させた。(I E25—26, II E20—21)

Tauri が命じたために、私自身、私の三十三歳の時に可汗として即位した。(II E34)

と示されているように、Tauri の命によつて可汗としてその位を得るとされてゐた。⁶²そしてその可汗としての資質は、

その可汗は勇敢であるという、その參謀は賢明であるという。(T10. 21, 29)

私の叔父である可汗が天翔つた時、賢明な、勇敢な可汗はいなかつた。(II E34)

とあるように、勇敢 (pḡ), 賢明 (bilgä) が條件とされていたようである。⁶³

それ故、先に翻譯しておいたオンギン碑文南面第四行の冒頭部分は、力強く勇敢な (küçlig alp) か賢明な (bilgä) 可汗たる我が父が、辰の年の七月天汗 (Tauri qan) によつて召し出されたのであると解釋されよう。このような解釋が許されるならば、先に考證した「Tauri bilgä qayan (天なる賢明な可汗)」が、「我が父」(Ilimis yabyu=咄悉匭) を表わしたものと考へても決して無理はなからうかと思ふ。

ともあれ、オンギン碑文南面第四行こそは、骨咄祿系一門と默噶一門との政争の狭間にあつて、弱小ながら同じ阿史那氏一族であるという誇りをもつ、咄悉匭系一門のささやかな自己主張なのであらう。

結びに代えて

これまでの考證の結果、次のような結論を得ることができた。

オンギン碑文は、上部に刻されているタムガが示しているように、闕特勤碑文・毗伽可汗碑文らと同様、突厥第二王朝阿史那氏の一族によって建立されたものである。そしてそれは、骨咄祿、默噶の弟として新舊兩唐書突厥傳に見える咄悉匄の紀功碑かと思われる。碑文を建立した人はその息子ではあるが、碑文東面第四行に兄の存在が見えるので、恐らくこれは咄悉匄の二男ではなからうかと思う。かれが父の葬儀を主宰し（南面第四行）父のために碑文を残したことは、當時かれが一門の後継者であったことを示している。

オンギン碑文が亡き父の記念碑としての性格をもちながらも、同時に、建立者自らの事跡も書き加えているのは、自らが父 Ilitmis'yabyu（咄悉匄）の後継者であることを、一族の者に明示するためであったと考えられる。

クローソンは、碑文主題者「我が父」の死亡年代を末年として、その設立年代を七三二（開元二〇）年から七三四（開元二二）年末に求めている。そしてそれは、既にあった噉欲谷碑文や闕特勤碑文を模して造られ、主體性のない精神分裂症（schizophrenia）的文章で彩られていると結論づけた。⁶⁴

本文でも述べておいたように、オンギン碑文にみえる若干の矛盾や碑文構成の不統一は、クローソンが述べるように、決して主體性のない模倣からくるものではない。それは、碑文に埋葬された「我が父」とその子碑文建立者の複雑な政治的立場からくるものであった。本文で述べたことを繰り返して言うならば、碑文主題者咄悉匄（Ilitmis）は、默噶政權の一翼を擔っていたが故に、開元四年六月の默噶の急死によって、表面化した骨咄祿一門と默噶一族の政争に巻きこまれたのである。かれが、默噶の後を追うようにして同年七月死亡したのは、毗伽可汗・闕特勤一族による肅清の結果であった。オンギン碑文南面第二行から第三行に見られる記述は、骨咄祿系と默噶系兩派の争いの下で、苦しい立場に追いこま

れた咄悉匱一門の苦澁を示したものである。

それ故、オンギン碑文は、主題者 *Itims* (咄悉匱) が死亡したと思われる開元四 (七一六) 年七月より遅くない時期に建てられたと推定される。そして、闕特勤による肅清の波が、やがて一族の者にまで及んだことは想像するに難くない。碑文に多くの脱落が見えるのも、これが比較的短期間に建てられたことを示している。更にオンギン碑文の文字の中で、*oz* などの文字が、闕特勤碑文や毗伽可汗碑文に見られないことは、オンギン碑文がそれらより古きことを示したものと云えまいか。

ともあれ、オンギン碑文は、弱小ながらも阿史那氏の一族としての誇りをもつ咄悉匱の一門が、突厥第二王朝建設に貢献したことを、突厥の民たちに高らかに示すためにつくられた記念碑であるといふことができよう。

註

- (1) オンギン碑文は、一八九一年、ロシアの民族學・考古學者ヤー・ドリンツェフ (Ядринцев, H.) によって、現モンゴル人民共和國のオンギン河流域のタラメルで發見された。その發見の経緯については、Orkun, H. N.; Eski Türk Yazitlari, cilt 2, Istanbul, 1936, 739. で述べられ、柴田武「オルホン碑文の發見と研究」(『東洋學報』第三一卷第三號、一九五四年) によって紹介されている。尙この碑文を、ソ聯の一部の學者は、フルブルエルトミシユ碑文と名づけているようだが、普通に發見された地名をとって、オンギン碑文と名づけた方がより適切であるように思う。護雅夫「クリヤシュトルヌイ他『A. N. コノフ教授滿六十歳記念チュルク學論文集』」(『東洋學報』第五三卷第二號、一九七〇年) 参照。
- (2) 噉欲谷碑文は、噉欲谷自身によって、開元四 (七一六) 年に作成され、かれが死亡した開元二三 (七二五) 年直後に建設されたと言われている。又、闕特勤碑文は、ヨルリグ・テギン (Yolir Tegin) が文章を草し、闕特勤の兄毗伽可汗によって建てられ、更に毗伽可汗碑文は、開元二三 (七三三) 年その子登利可汗 (Tegin Qayan) によって建設されたとされている。護雅夫「突厥碑文刳記——突厥第二可汗國における「ナシヨナリズム」——」(『東洋史研究』第三四卷第四號、京都、昭和五一年) 参照。尙本稿においては、噉欲谷碑文 (I)、闕特勤碑文 (II)、毗伽可汗碑文 (III)、オンギン碑文 (IV) と各々略記する。そして、東面・南面・西面・北面をそれぞれ E, S, W, N で示し、行番號を數字にてあらわす。

- (3) ラマロフは、オンギン碑文の最初の拓本取りを一八九二年に行ない、それを更に再生したものを一八九六年に發表してゐる。

Radioff, W.: *Atlas der Alterthümer der Mongolei*, Dritte Lieferung, Petersburg, 1896.

- (4) Radioff, W.: *Die alttürkischen Inschriften der Mongolei*, Dritte Lieferung, 1895, S. 249.

- (5) Marquart, J.: *Die Chronologie der alttürkischen Inschriften*, 1898, S. 40.

- (6) Radioff, W.: *Die alttürkischen Inschriften der Mongolei*, Zweite Folge, 1899, VIII—XI.

- (7) 小野川秀美「オンギン碑文譯註」(『羽田博士頌壽記念東洋史論叢』京都一九五〇年)四三—四五一頁。

- (8) ラマロフは、本碑文は毗伽可汗の治世中になるものと漠然と云ふてゐる。Radioff, W.: *op. cit.* Zweite Folge, S. XI. 小野川秀美氏は、毗伽可汗の初期のものと考えられた。小野川秀美「突厥碑文譯註」(『滿蒙史論叢』第四、座右寶刊行會、一九四三年)二六二頁。

- (9) 今、主たる論稿のみ列挙すると次のものがあつて、Bernштам, A. H.: *Социально-экономический строй орхон-енисейских туземцев в VI—VIII вв.*, Ленинград, 1946. Магов, С. Е.: *Памятники Древнетюркской Письменности Монголии и Киргизии*, Москва, 1959. Кляшторный, С. Г.: *Древнетюркские рунические памятники как источник по истории Средней Азии*, Москва, 1964.

Стеблева, В. И.: *Поэзия Тюрков VI—VIII веков*, Москва, 1965. Андаров, Г.: *Язык Орхонских Памятников Древнетюркской Письменности VIII века*, Алма-ата, 1971.

- (10) Clauson, G.: *The Origin Inscription*, J. R. A. S. 1957, pp. 178—192.

- (11) クローンによつて示された、碑文主題者の未成年死亡説は、テキンによつて支持されてゐる。Tekin, T.: *A Grammar of Orkhon Turkic*, Indiana, 1968, p. 290.

- (12) 拙稿「オンギン碑文東面第四行の解釋について」(『護雅夫博士還暦記念論文集』内陸アジア、西アジアの社會と文化)、『東京一九八三年刊行豫定』。

- (13) Radioff, W.: *op. cit.* (註⑤参照) 尙補助的に Магов, С. Е.: *там же* に收められている寫眞も利用した。ただこの寫眞は、後半部分が缺けている。

- (14) 本稿の譯は、小野川氏の譯(前掲論文〔註⑦参照〕、四四二—四四四頁)を基礎としながら、ベーロン(там же стр. 9—11)、『クローン』(*op. cit.*, pp. 188—191)、『テキン』(*op. cit.*, pp. 289—291) 氏らの譯をそれぞれ參考とした。本來轉寫も記しておかねばならないかもしれないが、紙數の關係もあつて割愛した。ただ、本稿で問題となる部分は、括弧で轉寫して置いた。尙後日「オンギン碑文譯解」(假題)として筆者の見解を發表する豫定である。

- (15) 突厥において、四方位を示す場合、これを東→南→西→北の順序で行なうのが普通だが、オンギン碑文では、中國文書で通

例となっている、東→西→南→北で示されている。これは、オングイン碑文製作者が、中國思想の強い影響を受けていたのかもしれない。護雅夫『*Seto*と四至』(『古代トルコ民族史研究』一、東京、一九六七年)四七七—四九九頁参照。

(16) 護雅夫、前掲論文(註(2)参照)、四頁。

(17) ホンショーツアイダム碑文が、イルテリシニョ可汗の功業を讃えているのに對し、オングイン碑文は、イリトミシユ葉護の偉業を贊美しており、兩碑文の違いが際立っていることは注意されてよい。

(18) 拙稿、前掲論文。

(19) 拙稿、前掲論文。

(20) 突厥第一王朝の沙鉢略可汗が隋の文帝におくった書に、「從天生大突厥天下賢天子伊利俱盧設莫何始波羅可汗」と自ら稱していることから明らかである。Насренев, B. M.: *Древне-тюркский словарь*, Ленинград, 1969, стр. 77.

(21) 小野川秀美、前掲論文(註(7)参照)四三七頁。

(22) 岩佐精一郎「突厥の復興に就いて」(『岩佐精一郎遺稿』、東京、一九三六年)一三〇—一三二頁。

(23) 片山章雄氏は、從來言われていた「九姓鐵勒」「鐵勒九姓」は中國側で補足されたものであって、Toyzuz Oyzuz の直譯は「九姓」であるとされ、本来の「九姓」は族長連合であったかもしれないと推定された。それ故、本稿でも Toyzuz Oyzuz を「九姓」と翻譯した。片山章雄「Toyzuz Oyzuz と「九姓」の諸問題について」(『史學雜誌』第九〇編第二二號、昭和五六年)三九—五五頁。

(24) 同様の記事が『新唐書』卷二二五突厥傳上、『通典』卷一九八邊防一四突厥中、『資治通鑑』卷二〇五唐紀二二等にも見られる。

(25) 岩佐精一郎氏は「唐人が塞外の事情に疎かりし」とされて、中國史料の記載を否定されるが、そうでないことは本文で述べた通りである。同「突厥毗伽可汗碑文の紀年」(註(22)所引前掲書)一八三頁。

(26) 『新唐書』卷二二五突厥傳上に、「天授初、骨咄祿死、其子幼不得立、默啜自立爲可汗篡位」とある。

(27) 護雅夫氏は、匭俱を本名とし、突厥語の可汗號が Inat, Init, qayan (移涅可汗)で、その中國語譯が拓西可汗であるとされた。同「Tonyuquq 碑文に見える bogit, būgit, qayan について」(『東洋學報』第五二卷第一號、一九六九年)六九頁。

(28) 『史記』卷一一〇匈奴傳に、「匈奴謂賢曰屠者、故常以太子爲左屠者王」とあり、『後漢書』卷八九南匈奴傳に、「其大臣貴者左賢王、次左谷蠡王、次右賢王、次右谷蠡王、謂之四角」とあるように、左が常に優位であった。

(29) 默啜が「父天上得果報天男突厥聖天骨咄祿默啜大可汗」(『唐故三十姓可汗貴女、賢力毗伽公主、雲中郡夫人、阿那氏之墓誌』)とあるように、「天男」「聖天」と名乗っていたことも傍證となろう。羽田亨「唐故三十姓可汗貴女阿那氏之墓誌」(『羽田博士史學論文集』上巻、言語・宗教編、京都、一九七八年)三六三頁。

(30) Radloff, W.: *op. cit.*, (註(4)参照) S. 249.

(31) 小野川秀美、前掲論文(註(7)参照)、四四七頁。

- 32) Андаров, Г.: там же. стр. 27.
 33) Маров, С. Е.: там же. стр. 11.
 34) Clauson, G.: *op. cit.*, p. 188.
 35) Tekin, T.: *op. cit.*, p. 247.
 36) Княшгорный, С. Г.: Руснические надписи из Восточной Гови, *Studia Turcica*, Budapest, 1971. 右論稿の紹介が護氏によつてなされている。護雅夫「エヌーゲー・クリヤン・トルヌマ」著「東ゴビのルーン文字銘文」(『東洋學報』第五七卷第一號、一九七四年)。
 37) 小野川秀美「鐵勒の一考察」(『東洋史研究』第五卷第二號、昭和十五年)一六一一一八頁參照。
 38) キルギスより我々は歸つた。突騎施の可汗より斥候がきた。その言葉は次のようだった。東の可汗に向け軍を出そうと言つた。(中略)我々を倒してしまふであらうと言つた。突騎施の可汗は出發した、とかは言つた。(T29. 30)
 39) 小野川秀美、前掲論文(註7)參照)〃四四一頁。
 40) ラエロン(*op. cit.*, [註(4)參照] S. 248.)〃テロン(там же стр. 11.)〃タローン(*op. cit.*, pp. 190—191.)。ただ、タルタワル、⁴⁴ Tātori bilgā qayan を默噤に比定して理解してゐる。(op. cit., p. 40.)
 41) 小野川秀美、前掲論文(註7)參照)〃四三九頁。
 42) 小野川秀美、前掲論文(註7)參照)〃四三三—四三六頁。
 43) 拙稿、前掲論文。
 44) 繁雜となるので一部だけ挙げると骨篤祿毗伽可汗(『新唐書』卷二二五突厥傳上) 苾伽骨咄祿可汗(『同』) 英武威遠毗伽可汗(『舊唐書』卷一九五迴紇傳) 毘伽闕可汗(『同』) 登羅羽錄沒密施句主錄毗伽可汗(『同』) 膝里野合俱錄毗伽可汗(『新唐書』卷二二七回紇傳上) 等である。他に中國人が突厥より可汗號を受ける例もある。大度毗伽可汗(『舊唐書』梁師都傳) この他、可敦、特勤が毗伽の稱號を名乗る例も數多くある。
 45) このような突厥における君主觀や美德觀念については、護雅夫氏の研究がある。
 46) Mori, M.: The T'u-chüeh Concept of Sovereign, *ACTA ASIATICA* 41, Tokyo, 1981. pp. 47—75.
 46) Clauson, G.: *op. cit.*, p. 192. Tekin, T.: *op. cit.*, p. 291. クロソンはこの未年を七三一(開元一九)年にあててゐる。
 47) 『資治通鑑』卷二二一唐紀二七玄宗開元四年の條には、「癸酉、拔曳固斬突厥可汗默噤首來獻。時默噤北擊拔曳固、大破之於獨樂水、侍勝輕歸、不復設備、遇拔曳固進卒頡質略、自柳林突出、斬之。(中略)頡質略以其首歸之」とあり、注に「又新舊紀皆云六月癸酉斬默噤、唐曆亦在六月」とある。
 48) 「四年六月、默噤爲拔曳固斬首來降。」(卷九四北突厥) 尙『冊府元龜』卷九七三外臣部助國討伐に「(玄宗開元四年)七月、突厥可汗默噤、背恩爲九姓拔曳固所殺、斬其首、送至京師」とあつて七月のこととされているが、これは六月の誤まりである。
 49) ここでは「左賢王」としているが、『通典』卷一九八突厥中も同様)〃『資治通鑑』卷二二一唐紀二七玄宗開元四年の條では「右賢王」としている(但し一九五六年北京古籍出版社刊標點本は「左賢王默棘連」とつづつてゐる)。だがこゝは「右賢王」

とつくるべきことは、小野川秀美、護兩氏の説かれるとおりである。小野川秀美、前掲論文（註⑧参照）、三五九頁。護雅夫前掲書、五九頁註七七。

60) 拙稿「匈奴君長權の性格——匈奴遊牧社會の歴史的規定をめぐって——」（『駿臺史學』第四三號、昭和五三年）参照。

61) 護雅夫「突厥の國家——「オルホン碑文」を中心に——」（『古

代史講座』第四卷、東京、昭和三七年）一〇〇—一〇三頁。この論文は、前掲書三六—三七頁に所収。

62) Mori, M.; *op. cit.*, pp. 74—75.

63) 毗伽可汗 (Bilga qat'an「賢明な可汗」) 沙鉢略可汗 (Ishbara qat'an「勇健な可汗」) 等はその典型的な例と言えよう。

64) Clauson, G.; *op. cit.*, p. 192.

AN INQUIRY INTO THE ONGIN MORTUARY STELE: THE PURPOSE AND DATE OF ITS ERECTION

SAWADA Isao

Ilitmiš yabγu, the individual eulogized in the Ongin mortuary stele, is the Tūrük language name of Duoxifu 咄悉匐 who appears in Chinese historical texts. The Ongin mortuary stele was erected by Duo-xi-fu's sons as a memorial of their father's accomplishments. The object of this essay is to elucidate when the Ongin mortuary stele was erected and why it was erected.

According to a statement in the fourth line of the inscription on the southern face of the Ongin stele, Ilitmiš yabγu (Duoxifu) died in the seventh month of the dragon year. This is of course the fourth year of the Kaiyuan 開元 period (AD 716). It is recorded in the Tūrük section of the *Jiu Tangshu* 舊唐書突厥傳 that in that year the Tūrük qaγan Bāγ čor 默啜可汗 died and that Qutluγ 骨咄祿's son Köl-tegin 闕特勤 took up arms supporting his elder brother Bilgäqaγan 毗伽可汗 and killed the entire clan of Bāγ čor. The date of Ilitmiš yabγu's death, as it is recorded on the Ongin stele, probably indicates that he was defeated in a struggle with Köl-tegin and killed.

In short, the clan which erected the Ongin stele had been driven into a difficult position, standing in the middle of a political controversy between the house of Qutluγ and the house of Bāγ čor. The inscription on the southern face of the Ongin stele well expresses their bitterness at that time.

In any event, the Ongin stele was erected not long after the death of Ilitmiš in 716. Thus, the stele was made as a memorial stele, exaggerating the position of the deceased as having belonged to a weakened clan of Ashina 阿史那, and intended to loudly promulgate to the Tūrük people the contributions made by the house of Duoxifu in founding the Tūrük state.